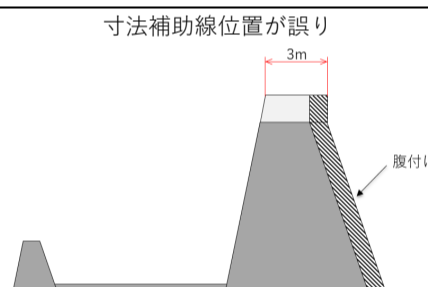
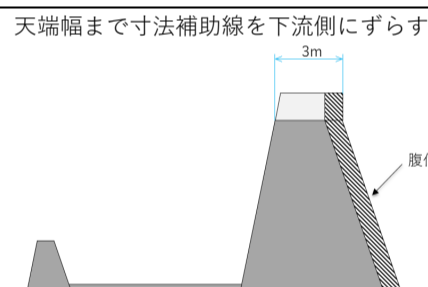


## 正誤表

この度、「新編・鋼製砂防構造物設計便覧 令和3年版」の記載内容に誤りがございましたので、下記のとおり訂正いたします。

新編・鋼製砂防構造物設計便覧 令和3年版 正誤表				
章	頁数	行数・図番	誤	正
2章	p.35	4行目	(4)土石流流速 $\cos^{1/2}\theta$	(4)土石流流速 $(\sin\theta)^{1/2}$
2章	p.37	14行目	「最大樹高を $h_{wm}$ (m) とすると、」	「最大樹高を $H_{wm}$ (m) とすると、」
2章	p.41	表2.9	「(1) 軸方向が引張の場合 $\sigma_t + \sigma_{bt} \leq \sigma_{bt}$ かつ $\sigma_t + \sigma_{bc} \leq \sigma$ 」	「(1) 軸方向が引張の場合 $\sigma_t + \sigma_{bt} \leq \sigma_{ta}$ かつ $\sigma_t + \sigma_{bc} \leq \sigma_{ba}$ 」
2章	p.47	8行目	STK490の降伏応力を $3200\text{N/mm}^2$ 、許容応力を $1900\text{N/mm}^2$ とすると、温度応力の安全率は1.5なので $2100\text{N/mm}^2$ ( $3200/2100 \div 1.5$ )となる。割増係数に直すと $2100/1900 \div 1.15$ となり、温度応力の割増しは1.15となる。	STK490の降伏応力を $315\text{N/mm}^2$ 、許容応力を $185\text{N/mm}^2$ とすると、温度応力の安全率は1.5なので $210\text{N/mm}^2$ ( $315/210 \div 1.5$ )となる。割増係数に直すと $210/185 \div 1.15$ となり、温度応力の割増しは1.15となる。
2章	p.48	6行目	鋼管STK490の許容応力 $1900\text{N/mm}^2$ 、降伏応力 $3200\text{N/mm}^2$ を例に説明します。設計外力に対して許容応力内に収まるよう設計を考える場合、弾性範囲内に収まるように断面を求めますが、実際には降伏応力まで弾性が保たれるので、 $3200/1900 \div 1.7$ の余裕があります。	鋼管STK490の許容応力 $185\text{N/mm}^2$ 、降伏応力 $315\text{N/mm}^2$ を例に説明します。設計外力に対して許容応力内に収まるよう設計を考える場合、弾性範囲内に収まるように断面を求めますが、実際には降伏応力まで弾性が保たれるので、 $315/185 \div 1.7$ の余裕があります。
2章	p.48	18行目	例えば、土石流時の1.5とは $1900 \times 1.5 = 2850\text{N/mm}^2$ を許容応力とすることであり、安全率に直すと $3200/2850 \div 1.1$ となります。	例えば、土石流時の1.5とは $185 \times 1.5 = 278\text{N/mm}^2$ を許容応力とすることであり、安全率に直すと $315/278 \div 1.1$ となります。
2章	p.50	写真2.1	「有珠川1号の沢1号スリット堰堤(昭和54年施工)」	「小有珠川1号の沢1号スリット堰堤(昭和54年施工)」
2章	p.57	表2.20右下	(掃流における余裕しる緩和条件) 「取り合え前提の部材は0.0mmでもよい。」	(掃流における余裕しる緩和条件) 「取り替え前提の部材は0.0mmでもよい。」
3章	p.74	16行目	「【参考5】土砂捕捉量と堰堤軸の関係を参照」	「【SABO技術ノート】5.設計外力のはなしを参照」
3章	p.80	8行目	「図3.21の方法で最大礫径を設定すべきでしょう。」	「図3.19の方法で最大礫径を設定すべきでしょう。」
3章	p.96	21行目	「礫衝突を想定する構造部材に対して径厚比に加えて板厚の規程と」	「礫衝突を想定する構造部材に対して径厚比に加えて板厚の規定と」
3章	p.114	23,27行目	「 $\delta_E$ 」「 $\theta_{pa}$ 」	「 $\delta_E$ 」「 $\theta_{pa}$ 」
3章	p.114	35行目	「ひずみ速度が $100.5/\text{sec}$ 程度の場合に」	「ひずみ速度が $10^{0.5}/\text{sec}$ 程度の場合に」
3章	p.116	13行目	「(4) 面外荷重」	「(3) 面外荷重」
3章	p.133	7行目	「別途天端緩衝材や盛による保護、鉄筋による補強を～」	「別途天端緩衝材や盛土による保護、鉄筋による補強を～」
3章	p.133	22行目	「②袖部の下流のり勾配または、」	「②袖部の下流のり勾配は直または、」
3章	p.135	17行目	(4) 非越流部を人工地山にする場合	(5) 非越流部を人工地山にする場合
3章	p.136	5,11行目	「「H22.3 事務連絡」に準拠し、」	「「H27.6 事務連絡」に準拠し、」
3章	p.137	図3.64	記号「a」	記号「d」
5章	p.183	図5.12上	寸法補助線位置が誤り 	天端幅まで寸法補助線を下流側にずらす 
参考資料	p.17	3行目	「 $K : 161(D_0/D)^{0.11}$ 」	「 $K : 161(D_0/D)^{0.11}$ 」
参考資料	p.17	19行目	「鋼管径609.6」	「鋼管径609.6mm」
参考資料	p.18	8行目	「 $K = 161 (D_0/D)^{0.11} = 161 (1000/609.6)^{0.11} = 161 \times 1.06 = 170$ 」	「 $K = 161 (D_0/D)^{0.11} = 161 (1000/609.6)^{0.11} = 161 \times 1.06 = 170$ 」
参考資料	p.18	11行目	「 $= 1/4 \cdot 170 \cdot 315 \cdot 222 \cdot 19829/304 = 423\text{J}$ 」	「 $= 1/4 \cdot 170 \cdot 315 \cdot 22^2 \cdot 19829/304 = 423\text{J}$ 」
sabo	p.15	19行目	「つま、閉塞型は土石流中の巨礫を～」	「つまり、閉塞型は土石流中の巨礫を～」
sabo	p.27	4行目	「その基準を順守しつつ、形状および寸法を確定するものdです。」	「その基準を順守しつつ、形状および寸法を確定するものです。」
sabo	p.27	39行目	「水平方向から作用する外力は、鉛直方法である～」	「水平方向から作用する外力は、鉛直方向である～」